

本気で学ぶ!全経簿記 1 級

DVD 講座

工業レジюме



本気で学ぶ全経簿記 1 級

工業編 1 (財務諸表作成)

①「消費」という概念をしっかりと

日商簿記 2 級のフリーテキスト講座の第 1 回を必ず見て下さい (一番大事)

勘定連絡図の中の消費の位置づけを押さえて下さい

ここで原価計算表と仕掛品 a/c の関係性も確認しておいて下さい

全経の総合問題を解くには必須の知識です

②予定配賦とは

計算の迅速性と個別原価計算における単価の安定性の為に行います

なぜ、そのような処理を行うのか

予定と実際の差額は外部にはどのように報告するのかの意識をもって下さい

③月次決算の考え方を理解する

最近では日商簿記 2 級でも月次決算の考え方が採用されています。

今回の財務諸表作成では月次発生額 (消費額) の計算を正しくできる能力が試されます

④整理前 T/B と整理後 T/B の概念

全経 1 級の工業では決算整理後 T/B が与えられるケースが多いです

整理後の持つ意味をしっかりと理解しましょう

各論編

177 回類題-解説用

材料費の勘定連絡を考えましょう

材料		仕掛品	
期首	消費	期首	
2,000,000	12,000,000	1,120,000	
購入	帳簿残	材料	
	2,200,000	1,200,000	
	実際残		
	2,100,000		

購入額は帳簿上の逆算です

$$\therefore 2,000,000 + X = 12,000,000 + 2,200,000$$

製品も同様の考え方で計算します

未払・前払を含む当期発生額の計算

感覚法

未払のケース

当期末未払：当期の経費だから加算

当期首未払：前期の経費だから減算（当期支払った中に前期分が含まれてるから）

前払のケース

当期末前払：来期の経費を当期支払ってるから減算

当期首前払：前期に当期分を払ってるから加算

仕訳法

未払のケース（賃金を例に）

再振替 未払費用 300,000 / 賃金 300,000

支払 賃金 4,090,000 / 現預金 4,090,000

見越 賃金 310,000 / 未払費用 310,000

<賃金計> 4,090,000 + 310,000 - 300,000 = 4,100,000

前払のケース（保険料を例に）

再振替 保険料 130,000 / 前払費用 130,000

支 払 保険料 990,000 / 現預金 990,000

繰 延 前払費用 120,000 / 保険料 120,000

< 保険料計 > 1,000,000

後は主要科目を勘定連絡図に展開し、製造原価報告書→損益計算書→株主資本等計算書→貸借対照表の順に記載する

問題文の後 T / B の空欄の考え方

< 借方 >

前払保険料は問題文より期末の数値

売上原価は C/R 作成してから製品勘定の BOX で算定

販売管理費は P/L 作成過程で確認できる

仮払法人税は逆算で 992,000

< 貸方 >

貸倒引当金は期末の計算結果

資本金は S/S より

未払賃金、外注加工費、電力量は問題文より期末の数値

売上は差額で 28,618,000

176 回類題-解説用（個別原価計算）

本試験では、ここまで書きませんが、あえて勘定連絡図を別紙に添付します。全体像を把握して頂くためです

主要科目（製品まで）を記入する。期首残高を記入する。
各取引を記入する。この時原価計算表に記入できるものは、先に記入する。
そのうえで勘定連絡（実際には解答用紙）に記入する

素材や直接工に関しては、間接材料になるものは問題用紙に金額記入する

175 回類題-解説用（工程別総合原価計算）

ポイントは勘定連絡図（計算用紙）の書き方につきます
処理すべきデータが多いのでしっかりと確認します

本来は横書きが良いが、プロジェクト説明の関係で縦書きにしています

半製品・副産物の取扱いに注意
副産物は仕損と同様に取り扱います（度外視法）

副産物等の処理と評価（原価計算基準を編集）

総合原価計算において、副産物が生ずる場合には、その価額を算定して、これを主産物の総合原価から控除する。副産物とは主産物の製造過程から必然に派生する物品をいう。

作業くず、仕損品等の処理および評価は、副産物に準ずる。

加工費の算定は賃金と経費と減価償却費を第一工程と第二工程にわたる

173回（講座では、このレジュメを使用していません。下記の内容を説明していますのでしっかり確認して下さい）

組別総合原価計算

資料の整理方法は日商2級とほぼ同じ。そこを押さえれば比較的理解しやすい論点です

「副産物を完成品原価から控除する」という考え方とBOXでの副産物の書き方をしっかりインクしておく必要があります。

171回→170回

部門の全体的な考え方をしっかり理解して下さい

その為には必ず171回で全体像を把握して、その上で170回を確認して下さい

できれば、事前に「日商2級フリーテキスト講座」の部門別計算を確認して下さい